

情動表出の制御に関する発達的研究の概観と展望

東京大学教育心理学研究室 平 林 秀 美

Review of the Developmental Studies on Regulation of Emotional Expression

Hidemi HIRABAYASHI

Since Saarni (1979) began to research on children's understanding of social display rules, some developmental research on regulation of emotional expression was reported. This paper reviewed these studies from a social developmental point of view and a cognitive developmental point of view.

First, from a social developmental point of view, children's acquisition of social display rules by socialization or social learning was suggested. Second, from a cognitive developmental point of view, the development of knowledge about strategy of emotion regulation, distinction between real and apparent emotion, and cognitive abilities was demonstrated. Finally, directions for continued research were shown. Especially the importance of consideration of social context and the influence of emotion regulation on interpersonal relationship were pointed out.

目 次

- I. 情動表出の制御
- II. 情動表出の制御の発達的研究
 - A. 社会的発達の視点からのアプローチ
 - 1. 仮想場面を用いた研究
 - 2. 観察研究
 - 3. 動機を考慮した研究
 - B. 認知発達の視点からのアプローチ
 - 1. 知識の獲得
 - 2. 本当の情動と見かけの情動の区別
 - 3. 認知能力
- III. 今後の課題
 - A. 場面の分類の必要性
 - B. 制御の方略に関する検討
 - C. 社会的文脈の考慮
 - D. 対人関係への影響

I. 情動表出の制御

最近発達心理学の分野では、情動 (emotion) に関する研究が盛んに行われている。本論文は、その中の1つのテーマである「情動表出の制御 (regulation)」に焦点を当てて研究を概観し、今後の研究の方向について考察するものである。情動表出の制御の発達には、Kopp (1989)¹⁾のように乳幼児が親との関係の中で自己の情動の制御を行うことを扱った研究や、遠藤ら (1991)²⁾の

ように2～3歳児の泣きの制御について扱った研究等も含まれるが、本論文では、幼児期から児童期にかけての他者との社会的関係の中での情動表出の制御に限定して、研究を紹介する。つまり、乳幼児が淋しかったり悲しかったりするのを何らかの方法で自己制御して泣かないようになるということについてではなく³⁾、例えば、幼児や児童が「他者から期待はずれの贈り物を受け取ってがっかりしたときに、相手の気持ちを考えて、うれしいふりをする」、「テストで予想外に悪い点数をとってがっかりしたが、自分のできの悪さを周囲の人々に悟られないために、がっかりしていないふりをする」といった事象について扱っていく。

さきの例で示したように、幼児や児童は私たち大人と同様に、日頃学校などで社会生活を営む際に、自分の情動 (気持ち) を常にそのまま表出するのではなく、制御しようとするのが少なくない。これは、自己の情動表出を制御することが、他者との関係を良好に保つために、あるいは、自分に対する他者からの評価をマイナスにしないために、必要なためであろう。従来の研究の枠組みでは、このような情動表出の制御が、社会的表示規則 (social display rules) の獲得によって可能になると捉えてきた (Saarni, 1979⁴⁾)。社会的表示規則とは、文化や社会の因習と結び付いた情動の表出の仕方に関する規則であり、ある場面ではどのような情動を表出すべきか、あるいは表出すべきでないかを示すものである。例えば、「お葬式のときは悲しみを表すべきだ」、「人から物をも

らったら喜ぶべきだ(期待はずれの物であっても、がっかりしたのを表すべきではない)」等である。

そして、Ekman & Friesen (1975)⁵⁾によれば、このような社会的表示規則は、情動表出の仕方により、以下に述べるような4つのカテゴリーに分類できる。まず、第1に情動表出の強調化がある。例えば、特に望んではいない贈り物をもらったときに、喜びを強く表す場合などである。第2に情動表出の最小化があり、競争相手に勝ったときになるべく喜びを抑える場合などがこれに該当する。第3に情動表出の中立化がある。これは、いわゆるポーカフェイスに当たり、ちょっとしたことで自分が批判を受けたときに、平静を装う場合などが含まれる。第4に情動表出の代用があり、これはある情動を他の情動に置き換えることにより、本当の情動を隠す(masking)場合である。例えば、自分よりも目上の人に対して怒りを感じても、相手には笑顔を示すことが、これに該当する。

以上のように、情動表出の制御の発達は、社会的表示規則の獲得と密接に結び付いているが、それではいつ頃からどのように社会的表示規則は獲得され使用されるようになるのであろうか。次章では、情動表出の制御について社会的発達の視点と認知発達の視点から行われた研究を紹介し、現在までに得られた知見を示すことにする。

II. 情動表出の制御の発達の研究

A. 社会的発達の視点からのアプローチ

情動表出の制御が社会的表示規則の獲得によって行われるようになることを重視し、社会的発達(社会化・社会的学習)の文脈で捉えた研究としては、次のようなものがある。

1. 仮想場面を用いた研究

まず、Saarni (1979)⁶⁾は、6, 8, 10歳の60名の子どもを対象に面接を行い、「期待はずれの誕生日プレゼントを受け取る」場面や「スケートが上手なことを自慢していたら、転んでしまった」場面など、相手との関係の上で情動(気持ち)を制御する必要がある仮想場面(4話)を提示して、場面の主人公がどのような表情をしようかおよびその理由を尋ねた。

この研究は、投影的な方法を用いて自発的な社会的表示規則の使用の発達の变化を調べたものであり、6, 8歳児よりも10歳児の方がより多く表示規則を使用し、表示規則に即した理由づけを行うという結果を得ている。また、理由づけを4つのカテゴリーに分類したところ、さらなるトラブルや悪い結果の回避(例:「怖がっている

のを見せると、きつといじめられるから)」のために情動表出を制御することが最も多く、次に自尊心の維持(例:「自慢した後に痛い様子を出すのは、馬鹿みたいだから」)、関係性の維持(例:「おぼさんの気持ちを傷つけない」)と続き、規範の維持(例:「そのように感じているのを示すのは、礼儀に反する」)が最も少なかった。

この理由の分析は、4つの仮想場面をすべて込みにして行ったものであり、使用した仮想場面の性質にかなり影響されていると思われる。そのため、少なくとも、場面毎に理由の分析を行っていく必要があり、この研究結果だけから、社会的表示規則はトラブルの回避のために最も多く使用されると結論づけるわけにはいかないであろう。

2. 観察研究

その後、このような仮想場面についての研究ではなく、実際に情動表出を制御する必要が生じるような場面を設定し、子どもの行動を観察した研究が行われた。

Saarni (1984)⁷⁾は、小学1, 3, 5年生45名を対象に、実験者の調査(算数や英語などのワークブックの難易度を調べると教示)に協力した後に、お礼を受け取る時の様子を観察した。セッション1では、お礼として、魅力的な物(ジュースやキャンディーや50セント硬貨などがきれいに包装されている物)を子どもに手渡し、その場で開けるように教示して、約10秒間子どもの様子を録画した。そして、1~2日後、また同じ調査に協力してくれるように頼んだ。セッション2では、お礼として、期待はずれの物(乳児用のおもちゃを包装した物)を手渡し、その場で開けるように教示して、約10秒間子どもの様子を録画した。その結果、セッション2では、小学1年生よりも3, 5年生の方がネガティブな情動表出を制御することが多いことと、男の子よりも女の子の方がより多く社会的表示規制を自発的に使用している(ポジティブな情動表出を行う)ことを見いだした。

また、Cole (1986)⁸⁾は、3~4歳の女児20名を対象に、Saarni (1984)⁹⁾の手続きを一部改良して、追試を行った。手続きの改良を行ったのは、以下に示す2つの点である。まず、1つは、子どもがお礼として受け取った物が確実にがっかりするような物であるようにしたことである。これは、実験に入る前に、子どもにおもちゃを好きな物から順に順位づけをしてもらい、最も好きではないと評定されたおもちゃをお礼として渡すことにより、操作した。もう1つは、社会的表示規則を他者との関係の上で使用していることを確かめるために、実験者の目の前でお礼を開ける状況と実験者が退室後にひとりでお礼を開ける状況を作ったことである。この操作により、子ども

は、実験者がいない状況でお礼を開けると明らかにがっかりした様子を示すが、実験者がいる状況ではがっかりしたのを隠そうとすることが明らかになった。従って、3～4歳の女児でも、実験者の前ではネガティブな情動表出を制御し、社会的表示規則を使用していることが示された。

以上の観察研究から、社会的表示規則の自発的な使用には性差が認められたことと、非常に早い年齢から表示規則が使用されていることが見いだされたが、これらは仮想場面の研究では得られなかった結果であり、特に興味深い。これについて、仮想場面を使用した研究は子どもの情動表出の制御に関する「知識」を扱っているに過ぎず、この「知識」と観察研究によって測定された実際の「行動」との間には、発達のタイム・ラグが見られることが多く、「知識」＝「行動」ではないという指摘がなされている (Meerum Terwogt & Olthof, 1989¹⁰⁾。

3. 動機を考慮した研究

そのほかに、Gnepp & Hess (1986)¹¹⁾の、小学1, 3, 5年生と高校1年生144名を対象にした仮想場面を用いた研究があるが、これは情動表出を制御しようとする動機(目的)が異なる場面毎に発達的变化を検討した点で特筆すべきものである。

この研究では2タイプの動機を考えており、1つは、相手との関係を守ったり行動の規範を維持するために情動表出を制御するという「向社会的動機 (prosocial motives)」に基づくものであり、もう1つは、自分にとってネガティブな結果を避けたり自尊心を維持するために情動表出を制御するという「自己保護的動機 (self-protective motives)」に基づくものである。向社会的動機に基づく場面としては、「おばさんから不格好なセーターをもらう」などの4話を提示し、自己保護的動機に基づく場面としては、「スケートが上手なことを自慢していたら転んでしまった」などの4話を提示した。その結果、社会的表示規則の使用は、小学1年生から5年生の間は年齢に伴って増加し、小学5年生と高校1年生の間には発達差が認められなかった。そして、子どもには、向社会的動機に基づく情動表出の制御(社会的表示規則)の方が、自己保護的な動機に基づく制御(表示規則)よりも、早くから理解されていることが示された。

これは、丸野(1991)¹²⁾も指摘しているように、向社会的動機に基づく情動表出の制御が、社会での道徳的規範の1つとして捉えられており、親のしつけや学校などの教育的な働きかけを通じて、非常に早い時期(幼児期)から学習されているためであろう。それに対して、自己保護的な動機に基づく情動表出の制御については、社会

からの圧力がかからないので、自分の経験を通して主体的に学習していかなければならず、児童期後期にならないと理解できないようである。

以上が、主要な研究であるが、社会的発達(社会的学習・社会化)の視点から情動表出の制御をレビューしたものとして、Saarni (1982¹³⁾, 1989¹⁴⁾, Saarni & von Salisch (1993)¹⁵⁾がある。社会的発達の文脈で行われた情動表出の制御に関する研究の成果として、仮想場面のほかに行動観察も導入し、幼児期から児童期にかけての社会的表示規則の獲得を通じて情動表出の制御が発達していく様子を実際に捉えたことが挙げられる。しかし、これらの研究では、情動表出の制御の発達の規定因として、社会・文化の影響を中心に考えており、制御を行う個人内の要因(例えば、情動に関する一般的な知識、意図、信念、認知能力など)については、ほとんど考慮されていない。確かに社会的表示規則の獲得には、さきに述べたように、親のしつけや学校などの社会からの働きかけが不可欠ではあるが、この規則をいつどのような目的(意図)で使うのかを子ども自身が判断する過程は個人内の要因に支えられているものであり、この点についても検討していくべきであろう。

B. 認知発達の視点からのアプローチ

認知発達の文脈で行われた情動表出の制御に関する研究としては、以下のようなものがある。

1. 知識の獲得

初期の研究では、子どもが情動についてどのような知識をもっているのかが主要なテーマであり、その枠組みの中で、情動表出の制御の方略(仕方)に関する知識が検討されている。

まず、Harris, Olthof, & Meerum Terwogt (1981)¹⁶⁾は、6, 11, 15歳児72名を対象に面接を行い、「楽しいふり」・「怒っていないふり」・「怖くないふり」ができるかどうかとその具体的な方略(どのように楽しいふりをするのか)について尋ねた。その結果、表情や言語的・行動的反応を変えることによって代わりの情動を表出することができるなどの、情動表出の制御の有効な具体的方略を挙げることはできたのは、6歳児で半数以下であり、11歳児で3分の2、15歳児で約半数であった。特に15歳児は、情動表出を制御することの難しさについて言及することが多く(例えば、「情動表出を制御しようとする意図があっても、うまくできるとは限らない」など)、そのために11歳児よりも方略を挙げるのが少なかったと思われる。

また、Carrol & Steward (1984)¹⁷⁾は、4～5歳児と

8～9歳児60名を対象に面接を行い、「気持ちは変えられるか」、「自分の気持ちを隠せるか」という質問とその方略について尋ねた。そして、8～9歳児の半数が情動表出を制御するための方略を具体的に挙げられたのに対し、4～5歳児のほとんどは方略を挙げる事ができなかった。

以上の研究は、情動表出の制御を意図的に行うための方略的な知識の獲得が、就学前ではまだ不十分なことを示唆するものである。従って、さきに述べたCole (1986)¹⁸⁾の研究では、情動表出の制御は既に3～4歳でも一部観察されているが、これらの行動が制御者自身の意図を伴ったものではなく、その場の状況に依存したスキプト的判断¹⁹⁾によるものである可能性が高いと思われる。しかしながら、幼児が面接者の質問に対して言語的に応答することが難しく、たとえ知識があったとしてもそれを表現できなかったという解釈可能性も残る。

ところで、このような情動表出の制御の方略(仕方)に関する知識は、健常児と情緒障害児との間に差異があることがわかっている。Taylor & Harris (1984)²⁰⁾は、7～8歳、10～11歳の健常児36名と情緒障害児36名を対象に、仮想場面を用いて「どうしてその場面では、情動表出の制御が必要なのか」を尋ね、社会的表示規則に関する知識を検討した。その結果、情緒障害児よりも健常児の方が社会的表示規則に関する知識をより早くから獲得しており、特に7～8歳児では顕著な差が認められた。しかしながら、この知識の差をもたらすものが何であるかはまだ明らかになっておらず、今後の検討が必要である。

2. 本当の情動と見かけの情動の区別

近年の研究では、情動表出の制御の方略(仕方)に関する知識そのものよりも、その前提的な知識となる「人は、本当の情動とは異なる情動を外に表すことがある」ということを、子どもが認識しているかどうかに焦点が当てられている。

Harris, Donnelly, Guz, & Pitt-Watson (1986)²¹⁾は、イギリスの4, 6, 10歳児を対象に、主人公が自分の本当の情動を制御しようとしている場面を提示した。例えば、「ダイアナは友だちと一緒にゲームをして遊んでいます。ゲームが終わり、ダイアナが勝ち、友だちは負けてしまいました。ダイアナは、友だちがもう遊びたくなくなると困るので、自分の気持ちを隠そうとしています。」という場面など8話を使用した。そして、「主人公は本当はどのような情動なのか」と「主人公はどのような情動に見えるようにしているのか」の両方の質問をして、うれしい、悲しいなどの情動を示す顔を描いた表情図の中

から答えを選択させた。その結果、6歳児でも本当の気持ちと見かけの気持ちの違いを理解していることが見いだされた。しかしながら、4歳児では、まだこの違いを識別できないことも明らかになった。

その後、Harrisらは同様の研究をアメリカや日本の4, 6歳児を対象に実施し、イギリスでの研究結果と比較したが、本当の気持ちと見かけの気持ちの区別ができるようになる年齢に、文化的な差異は認められなかった(Gardner, Harris, Ohmoto, & Hamazaki, 1988²²⁾; Gross & Harris, 1988²³⁾。

これらの一連の研究から、情動表出の制御の文化差には、本当の情動と見かけの情動の違いを認識するなどの知識獲得そのものよりも、知識を実際に行動へ移そうとする意図や動機づけの違いが効いているのではないかと推測されるが、この点についての検証はまだ行われていない。

3. 認知能力

ところで、今まで記してきたような情動表出の制御および社会的表示規則の理解を支える認知能力の1つとして、Millerら²⁴⁾の再帰的思考(recursive thinking)が考えられる。再帰的思考とは、「他者が別の他者について考えているところを考える」などのように、複雑な構造をもつ思考のことである。例えば、“I think that you think that he think that……”というような思考を指す。

Harris & Gross (1988)²⁵⁾は、4, 6歳児に、話の主人公が情動表出の制御を行った理由を尋ね、6歳児の半数が再帰的な思考を伴った理由づけを行ったことを示した。例えば、前述のダイアナと友だちがゲームをした話の理由づけとしては、「ダイアナは、自分が勝って本当はうれしいということを、友だちには知られたくない」(“She didn't want her friend to know that she really feels happy that she won.”)などが挙げられた。また、丸野・藤田(1991)²⁶⁾は、小学2, 4年生89名を対象に、社会的表示規則の理解度と再帰的思考能力を測定した。そして、再帰的思考能力が高い子どもほど社会的表示規則を適切に使っているという結果を得ている。

なお、そのほかの情動表出の制御を支える認知能力としては、内田(1991)²⁷⁾が指摘しているように、自分の情動表出が社会的にどのように解釈されるのかを予測したり、相手が何を意図しているのかを推測する、モニタリング能力が考えられよう。

以上が主要な研究であるが、認知発達の視点から情動表出の制御についてレビューしたものとして、Harris (1989)²⁸⁾, Meerum Terwogt & Harris (1993)²⁹⁾がある。認知的発達の文脈で行われた情動表出の制御に関する

る研究の成果としては、情動表出の制御の発達を社会化だけで説明するのではなく、発達を支える要因として、方略的知識の有無、本当の情動と見かけの情動の区別、再帰的思考能力、モニタリング能力など制御者の個人内の認知的要因を取り上げて検討したことが、挙げられる。しかしながら、これらの知識および認知能力を既に獲得していても、実際には情動表出の制御を行わないこともあるので、今後の研究では、獲得した知識を行動に移す過程や、それに影響する社会的・文化的背景も含めて考えていくべきであろう。

III. 今後の課題

以上、情動表出の制御に関して、社会的発達の視点と認知発達の視点から行われた研究の現状を概観してきた。しかしながら、情動表出の制御の発達の研究は、始まってからわずか数十年であり、今後検討すべき多くの課題を抱えている。そこで、以下の各節では、情動表出の制御を測定するために使用する場面の分類の必要性、制御の方略に関する検討、社会的文脈の考慮の必要性、情動表出の制御が対人関係に及ぼす影響の検討について述べ、今後の研究の方向を展望する。

A. 場面の分類の必要性

情動表出の制御の発達に関する先行研究に共通する問題点として、研究に使用された場面があまりにも雑多であり、一口に「情動表出の制御を必要とする場面」と言っても、かなり性質が違うものが入り混じっていることが挙げられる。そして、その中には、例えば「クッキーをポケットの中に隠したのを母親に悟られないようにする」場面や、「友だちのパーティーに行きたいのでお腹が痛いのを母親に悟られないようにする」場面のように、情動そのものを隠そうとする（制御する）のではなく、情動以外の物事を隠そうとするような場面も含まれている。そこで、情動表出の制御を必要とする場面を、あらかじめ何らかの基準で分類しておき、分類された場面毎に発達の变化を検討する必要があるだろう。

分類基準の1つとして、情動表出の制御を行う際の意図（動機）に着目することが考えられる。既に前章で述べたように、Gnepp & Hess (1986)³⁰⁾は、向社会的動機に基づく場面と自己保護的動機に基づく場面の2つに分類し、向社会的動機に基づく情動表出の制御の方がより早くから理解されていることを示している。また、平林 (1992)³¹⁾は、大学生が対象ではあるが、情動表出を制御する理由（動機）を考慮した上で場面の収集および整理

を試みた。そして、ポジティブな情動表出を制御しようとする場面を、「相手への配慮」、「自分が得をするため」、「照れ隠し、ネガティブな結果を避ける」、「社会的・道徳的規範の維持」の4パターンに、ネガティブな情動表出を制御しようとする場面を、「周囲への配慮」、「自尊心の維持」、「社会的・道徳的規範の維持」、「相手の意図への配慮」の4パターンに分類している。さらに、平林・柏木(1993)³²⁾は、小学3、5年生および中学1年生を対象に調査を行い、動機（意図）が異なると情動表出の制御の発達傾向が異なることも見いだしている。しかしながら、同じ場面であっても個人によって情動表出を制御する動機が異なることもあり、場面を動機別に完全に分類するのはなかなか難しいことでもある。

もう1つの分類基準として、情動の種類に着目することが挙げられる。先行研究では、たとえ情動の種類別の分類を行ったとしても、ポジティブな情動表出を制御しようとする場面とネガティブな情動表出を制御しようとする場面に分ける程度であった。しかしながら、特にネガティブな情動に関しては、悲しみ、怒り、恐れ、落胆など、様々な情動があり、これらの情動表出の制御の発達は異なることが予想されよう。例えば、Underwood, Coie, & Herbsman (1992)³³⁾は、怒りの表出の制御に焦点を当てて研究を行っており、今後はこのように個別の情動の制御に関して、十分に検討していくべきであろう。

B. 制御の方略に関する検討

さきにI章で述べたように、Ekman & Friesen (1975)³⁴⁾は、情動表出の制御の仕方（方略）によって、社会的表示規則を、情動表出の強調化、最小化、中立化、代用（置き換え）の4つに分類している。情動表出の制御一般に関して、知識としてどのような方略をとるのかについては既に検討されてきたが、個々の状況で実際にどのような方略をとるのかについては研究されていない。これは1つには、情動表出の制御の観察研究では、制御時の表出行動はわかっても、そのときに本当はどのような情動を感じているのかを測定できないという方法論上の問題があり、そのために、どの方略をとったのか確定できないからであろう。

一方、仮想場面を使用した研究では、主人公の情動表出を情動の強弱を示した表情図から選択することにより、方略の測定を行っている。例えば、山口(1986)³⁵⁾は、小学校低学年（1・2年生）、中学年（4年生）、大学生54名を対象に面接を行い、「期待はずれの誕生日プレゼントをもらって、とてもがっかりした」場面などを提示した。そして、小学校低学年児は情動表出の最小化、中学

年児は最小化あるいは中立化, 大学生は中立化あるいは代用 (他の情動表出への置き換え) というように, 情動表出の制御の方略には発達的变化があることを見いだしている。また, 片桐(1993)³⁶⁾も, 5, 7, 10歳児47名を対象に4つの仮想場面を提示して面接を行い, 情動表出の制御方略について検討を行った。その結果, 場面に左右されるものの, 5歳児でも情動表出の中立化や代用という方略をとっていることを示した。以上のような仮想場面を用いた研究で, どの程度現実場面での方略に近いデータを収集できるのかは議論の余地が残るところだが, 情動表出の制御の結果(情動表出を制御することが, 他者にどのような影響を与えるのか)を考える上では, 制御方略について検討することは重要な課題であろう。

C. 社会的文脈の考慮

既に Cole(1986)³⁷⁾が示したように, 私たちはひとりである状況では情動表出を制御する必要をあまり感じないが, 誰かと一緒にいるときには本当の情動を悟られないために, 表出を制御することがある。従って, 自己の情動表出を制御するかどうかを決定する際に, 誰と一緒にいるのかなどの社会的文脈の要因を考慮する必要があるだろう。

それでは, どのような相手と一緒にいるときに, 情動表出をより制御するのであろうか。まず, 相手と自分の社会的な関係(立場)について検討した研究の例を挙げることにする。Saarni(1988)³⁸⁾は, 小学2, 5年生, 中学2年生85名に, 「自分の本当の気持ち(情動)を誰に対して表出するか」という質問をした。そして, 小学2年生は大人(家族など)に対して本当の情動を表出すると答えるが, 小学5年生や中学2年生になると, 仲間に対して表出することが増えていくという結果を得ている。また, Underwood, Coie, & Herbsman(1992)³⁹⁾は, 小学3, 5年生, 中学1年生が仲間に対してよりも教師に対する怒りの表出を制御することが多いことを示した。

次に, 相手との親しさ(親密度)によって情動表出の制御の仕方が異なるかどうかを調べた研究には, 以下のようなものがある。Saarni & von Salish(1993)⁴⁰⁾によると, Saarni(1991)⁴¹⁾は, 12歳頃の子どもが自己の情動表出を制御するかどうかを, 相手との親しさの程度によって判断していることを示した。また, 大人を対象にした研究ではあるが, 平林(1993a)⁴²⁾は, 親しい相手(友人)に対してよりもあまり親しくない相手(知人)に対しての方が, 情動表出を制御するという結果を得ている。

このような情動表出の制御を行う際の社会的文脈の研究は, 発達的な視点からはあまり行われていない。しか

し, 情動表出の制御が対人場面で生じる以上, 社会的な文脈から切り離して論じることができない。従って, このような研究を積み重ねていくことが, 今後はさらに必要となるであろう。

D. 対人関係への影響

これまでのところでは, 情動表出の制御の発達そのものに焦点を当てて論じてきたが, 情動表出の制御の結果, すなわち, 情動表出を制御することが実際の対人関係にどのような効果をもたらすのかについては, 今まであまり検討されてこなかった。

その中で, Saarni(1988)⁴³⁾は, 小学2, 5年生, 中学2年生85名に, 「いつも自分の本当の情動を表す子どもは, 社会(周囲)からどのように思われるか」, 「いつも自分の本当の情動を表さない子どもは, 社会(周囲)からどのように思われるか」という質問をした。その結果, いつも本当の情動を表す子どもについては「他者から拒絶される」という回答が多く(全体の57%), また, いつも本当の情動を表さない子どもについては「嫌われる」(24%), 「何を考えているかわからず, 理解し難い」(18%)などの回答が得られた。この研究では, 質問文中に「いつも」という言葉が入っていたために, いずれも否定的な評価が多くなったのではないと思われる。

その後, 平林(1993b)⁴⁴⁾は, 大人を対象にした研究ではあるが, 仮想場面を用いて, 情動表出を制御する者と制御しない者に対する対人評価や対人感情を調べた。そして, 相手への配慮などの向社会的な動機で情動表出を制御する者に対する評価は高いが, 自尊心の維持などの自己保護的な動機で情動表出を制御する者に対する評価は低いことを示している。また, 平林(1993c)⁴⁵⁾, 平林・柏木(1993)⁴⁶⁾は, 小学3, 5年生および中学1年生430名を対象に, 仮想場面を用いて被験者自身の情動表出の制御の程度を測定し, ソシオメトリック・テストによる仲間からの評価との関連を検討した。そして, 自尊心の維持などの自己保護的な動機で情動表出を制御する者に対する仲間からの評価は低い, 相手への配慮などの向社会的な動機で情動表出を制御する者に対する評価は子どもの年齢により異なるという結果を得ている。

以上に示したように, 現在までのところ情動表出の制御と対人関係との関連を検討した研究は非常に少ない。しかし, 社会的な場面での情動表出の制御を扱っているかぎり, この問題は避けて通れないものと思われる。今後は, 情動表出の制御と対人関係との相互的な関係を探究するとともに, そこに関与していると思われる情動表出の制御に関する信念(考え方)の発達についても検

討していくべきであろう。そして、この信念についての研究を進めることによって、これまでの情動表出の制御の年齢差に焦点を当てた研究から脱し、個人差に焦点を当てた研究への転換がはかれるであろう。

(指導教官 井上健治教授)

注・引用文献

- 1) Kopp, C. B. 1989 Regulation of distress and negative emotions : a developmental view. *Developmental Psychology*, 25, 343-354.
- 2) 遠藤利彦・鈴木さゆり・常田秀子・山口真美・伊藤忠弘 1991 2～3歳児における社会性の個人差(1), (2), (3), (4) 日本発達心理学会第2回大会発表論文集, 167-170.
- 3) これについては、遠藤利彦(1993) 情動とその制御 無藤隆(編) 別冊発達15. 現代発達心理学入門 ミネルヴァ書房 pp.82-98. を参照されたい。
- 4) Saarni, C. 1979 Children's understanding of display rules for expressive behavior. *Developmental Psychology*, 15, 424-429.
- 5) Ekman, P. & Friesen, W. V. 1975 *Unmasking the face*. Englewood Cliffs, N. J. : Prentice-Hall.
- 6) Saarni, C. 1979 op. cit.
- 7) Saarni, C. 1984 An observational study of children's attempts to monitor their expressive behavior. *Child Development*, 55, 1504-1513.
- 8) Cole, P. M. 1986 Children's spontaneous control of facial expression. *Child Development*, 57, 1309-1321.
- 9) Saarni, C. 1984 op. cit.
- 10) Meerum Terwogt, M. & Olthof, T. 1989 Awareness and self-regulation of emotion in young children. In C. Saarni & P. L. Harris (Eds.), *Children's Understanding of Emotion*. Cambridge University Press. pp.209-237.
- 11) Gnepp, J. & Hess, D. L. R. 1986 Children's understanding of verbal and facial display rules. *Developmental Psychology*, 22, 103-108.
- 12) 丸野俊一 1991 心の働きについての理論 丸野俊一(編) 新・児童心理学講座5 概念と知識の発達 金子書房 259-315.
- 13) Saarni, C. 1982 Social and affective function of nonverbal behavior : developmental concerns. In R. S. Feldman (Ed.), *Development of Nonverbal Behavior in Children*. New York : Springer-Verlag. pp.123-147.
- 14) Saarni, C. 1989 Children's understanding of strategic control of emotional expression in social transactions. In C. Saarni & P. L. Harris (Eds.), *Children's Understanding of Emotion*. Cambridge University Press. pp.181-208.
- 15) Saarni, C. & von Salisch, M. 1993 The socialization of emotional dissemblance. In M. Lewis & C. Saarni (Eds.), *Lying and Deception in Everyday Life*. Guilford. pp.106-125.
- 16) Harris, P. L., Olthof, T., & Meerum Terwogt, M. 1981 Children's knowledge of emotion. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 22, 247-261.
- 17) Carrol, J. J. & Steward, M. S. 1984 The role of cognitive development in children's understandings of their own feelings. *Child Development*, 55, 1486-1492.
- 18) Cole, P. M. 1986 op. cit.
- 19) 内田伸子(1991) 子どもは感情表出を制御できるか 一幼児期における展示ルール (display rule) の発達— 日本教育心理学会第33回総会発表論文集, 109-110. を参照のこと。
- 20) Taylor, D. A. & Harris, P. L. 1984 Knowledge of strategies for the expression of emotion among normal and maladjusted boys : a research note. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 24, 141-145.
- 21) Harris, P. L., Donnelly, K., Guz, G. R. & Pitt-Watson, R. 1986 Children's understanding of the distinction between real and apparent emotion. *Child Development*, 57, 895-909.
- 22) Gardner, D., Harris, P. L., Ohmoto, M., & Hamazaki, T. 1988 Japanese children's understanding of the distinction between real and apparent emotion. *International Journal of Behavioral Development*, 11, 203-218.
- 23) Gross, D. & Harris, P. L. 1988 False beliefs about emotion : children's understanding of misleading emotional displays. *International Journal of Behavioral Development*, 11, 475-488.
- 24) Miller, P. H., Kessel, F. S., & Flavell, J. H. (1970) Thinking about people thinking about people thinking about…… : a study of social cognitive development. *Child Development*, 41, 613-623. を参照のこと。
- 25) Harris, P. L. & Gross, D. 1988 Children's understanding of real and apparent emotion. In J. W. Astington, P. L. Harris, & D. R. Olson (Eds.), *Developing Theories of Mind*. Cambridge University Press. pp.295-314.
- 26) 丸野俊一・藤田豊 1991 子供のディスプレイルールの理解に関する発達の研究 日本発達心理学会第2回発表論文集, 103.
- 27) 内田伸子 1991 op. cit.
- 28) Harris, P. L. 1989 Hiding emotion. In P. L. Harris, *Children and Emotion*. Blackwell. pp.127-148.
- 29) Meerum Terwogt, M. & Harris, P. L. 1993 Understanding of emotion. In M. Bennett (Ed.), *The Child as Psychologist*. Harvester Wheatsheaf. pp.62-86.
- 30) Gnepp, J. & Hess, D. L. R. 1986 op. cit.
- 31) 平林秀美 1992 感情表出のコントロール場面の検討 日本発達心理学会第3回大会発表論文集, 90.
- 32) 平林秀美・柏木恵子 1993 情動表出の制御と対人関係に関する発達の研究 発達研究, Vol.9, 25-39.
- 33) Underwood, M. K., Coie, J. D., & Herbman, C. R. 1992 Display rules for anger and aggression in school-age children. *Child Development*, 63, 366-380.
- 34) Ekman, P. & Friesen, W. V. 1975 op. cit.
- 35) 山口雅史 1986 表出行動のコントロールに関する発達の研究 II 日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 544-545.
- 36) 片桐義晴 1993 社会的場面における感情の自己統制に関する発達の研究 立教大学文学部卒業論文 (未公刊)
- 37) Cole, P. M. 1986 op. cit.
- 38) Saarni, C. 1988 Children's understanding of the interpersonal consequences of dissemblance of nonverbal emotional-expressive behavior. In B. DePaulo (Ed.), *Deception*. Special Issues of Journal of Nonverbal Behavior, Vol.12, pp.275-294. New York : Plenum.
- 39) Underwood, M. K., Coie, J. D., & Herbman, C. R. 1992 op. cit.
- 40) Saarni, C. & von Salisch, M. 1993 op. cit.
- 41) Saarni, C. 1991 Social context and management of emotional-expressive behavior : children's expectancies for when to dissemble what they feel. Paper presented at the meeting of the Society for Research in Child Development,

Seattle, WA.

- 42) 平林秀美 1993a 感情表出のコントロールに対する認識—表出対象によるコントロールの差異を中心に— 日本教育心理学会第35回総会発表論文集, 14.
- 43) Saarni, C. 1988 op. cit.
- 44) 平林秀美 1993b 感情表出のコントロールの差異が対人関係に及ぼす影響(2) 日本心理学会第57回大会発表論文集, 666.
- 45) 平林秀美 1993c 感情表出のコントロールの差異が対人関係に及ぼす影響(1) 日本発達心理学会第4回大会発表論文集, 217.
- 46) 平林秀美・柏木恵子 1993 op. cit.